

016.2
I841



謹て文庫贊助各位に呈す

(自明治四十四年十月二日
至大正元年九月三十日)

271
13

私立石坂文庫第三年報

基隆 石坂文庫



始



~~278-33~~

016.2

I841

(7)

石坂文庫

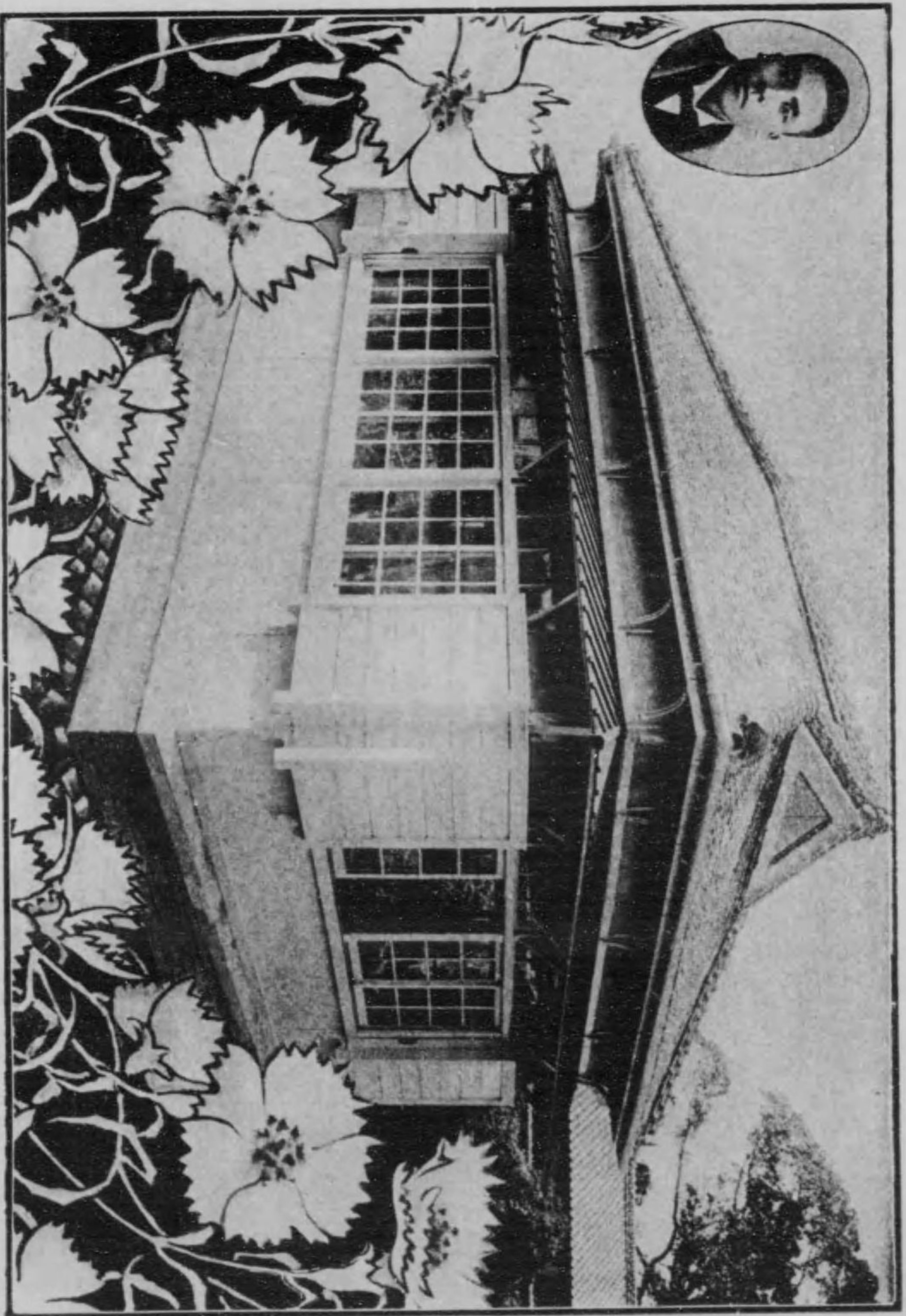


- 目次
- 口繪 石坂文庫と其創設者
 - 文庫設立の趣意
 - 設立文庫小啓
 - 文庫規定
 - 巡回書庫規定
 - 創立梗概
 - 建築及設備
 - 本期間の経過
 - 會計
 - 統計
 - 寄贈圖書
- 以上

石坂文庫 寄贈本

一頁 二一四五六七七八二





石坡文庫之創設者

石坂文庫設立の趣意

我國に於ける圖書館建設の事業は、輒近著しき發達を爲し、中央繁華の大都市は勿論地方の村邑に至るまで、競て之を企畫し、公立に私設に其經營設備漸く整頓し、今や全く讀書界の傾向を一變して貧窮苦學の青年は容易に閱覽の便を得、群籍涉獵に希望ある學徒は、居ながら其目的を全うするに至れり

雖て本島讀書界の現況を観るに、頗る憾みなき能はず、即ち全島中未だ一の完全なる圖書館あるに非ず、坊間の書肆に在りても概ね朝刊暮廢の翻々たる雜誌か然らずんば稗史小説の類を嚮くに過ぎず、一私人の藏書家と稱する者に至ては寥寥稀に之れ在るのみ、然れば偶、讀書の嗜好を有する士君子と雖も、毎に痛嘆の聲を放たざるは稀なり

蓋し何れの殖民地、何れの新領土と雖も、其當初に於ては時俗概ね利慾に趨るものにあらずんば即ち蕩々として逸樂を事とし殆ど救ふ可らざるの傾向を有するを常とするは、史籍の證する所たり、然るに本島の如きは領有以來未だ纔に十有五の星霜を閱したるに拘らず、多數の母國人は漸く秩序的生活状態に遷り、一般に出稼の觀念を去つて永住的經營を爲すに至り、智育上の施設も年を追うて完備の域に進みつゝあり、是れ諸外國に於ける殖民地若くは新領土の經歷に比し頗る早熟を誇るに堪へたり、然れども一般智識の増進は之を以て満足すべからざるは勿論、更に社會の傾向を導いて讀書研學の嗜好に進ましめ、以て母國の文運に追從せしむ可きは、今日の急務たるや言ふ迄もなし、圖書館建設の事業に以て刻下の急需に應ずべき唯一の業なる可し

而して又本島人の讀書傾向を思惟するに、由來清國の經營に與ること既に二百有餘年なりと雖も、未だ全く殖民地的状態を脱するに至らず、加ふるに復我領有に歸して再び新しき殖民地的氣質を醸生したるを以て一般に讀書の趣味に乏しく、隨つて書籍を藏するもの實に稀なり、近來邦文書籍の

較普及せらるゝに至れるも衆庶の縦覽すべき機關あらざるを以て、此方面に於ても亦圖書館の必要を認むべきに非ずや

要するに單に一般智識の養成に於けるのみならず、凡そ清國の初めて本島を占有せし當時以來今日に至るまでに於ける歴史の書冊は言ふ迄もなく、現今文運の開發に關して調査すべき恰好の參考資料を得るに孜々たらざるもの鮮し、況んや基隆の地は實に内地交通の關門にして、内地より渡來せる人々は必ず一たび此地を通過し、先づ本島の形勢事情等に就きて大體の調査を試みんとし、其機關なきに絶望するもの比々皆然り、蓋し是れ本島の咽喉たる基隆の體面上將た新領土たる我が臺灣の體面上寔に慚愧に堪へざる次第ならずや

加ふるに、我基隆の如きは中等程度の學校若くは一の書林すら有するに非ず、實に智育の設備に於て全く闕如せるや勿論、新たに渡航せる者に對して提供すべき調査材料の準備なきこと上述の如し、此に於てか、之を内にしては基隆のため將た全島のため、之を大にしては母國一般のため、基隆に於て圖書館を建設する事は、蓋し無益の業に非ずと言はんより、寧ろ刻下の急務なりと謂つべし、若し夫れ完全なる設備は公設若くは鉅産を有する篤志家の經營に待たざる可らず、微力の能く企て及ぶ所にあらずと雖も、其基礎を樹て形式を整へ、累年倦まず一圖一卷の購入蒐集に勉めば、致上の理由に對して庶幾くは多少の貢獻を爲すの時機到來するを得べき歟、微力予の如きもの敢て隗始の舉に出るは素より有力なる義人君子の盛舉を促さんと欲するに外ならざる也、乃ち自ら揣らす石坂文庫の創設を企畫せり、茲に聊か所感を記し以て創設の主旨を述べ

明治四十二年六月一日

石坂莊作

設立文庫小啓

我國建設圖書館之事業。近年已益發達。勿論中央大都會。雖至地方村邑。亦無不力爭經營之、公設私設。

燦然日備。于是讀書界之趨向爲之一變。窮士苦學者既得易于閱覽。而涉獵自喜者。亦全遠其目的矣。

然觀夫本島讀書界之現狀。似不無遺憾。即全島中無一完全之圖書館。坊間所嚮者。只有朝刊暮廢之雜誌。不然則稗史小說耳。個人中可稱藏書家者絕少。雖有深思好學之君子。亦惟徒喚奈何而已矣。

今夫殖民地與夫新領土二者。其初時俗即不趨于利慾。然以日耽于逸樂故。往々有不可救者。史冊殆照然也。乃領臺僅十有五年。而許多母國人之來此者。遂能去其僑寓之心。而變爲永久之計。智育日進于完備。是較他處之殖民地與新領土。其諸練殊獨早也。則增進一般之智識使之滿足。導社會而使之好學。以得附于母國之文運。因爲當務之急也。圖書館建設一事。尤烏可以已耶。

願本島人之讀書思想。雖隸清國者二百有餘年。實未全脫殖民地之習氣也。兼之改歸我有。殖民地習氣復日見其叢生。宜其少于讀書之趣。藏書者亦隨之而稀也。近則邦文書籍似較普及。猶無此可供衆覽之機關。于此方面而建一圖書館。豈無足重輕之謂乎。

要之。此不獨養成一般之智識。勿論自清政府至是之歷史。即關於開發今日之文運。可供爲參考之好材料者。其不汲々查及者亦極少。況基隆爲內地交通之孔道。自內地來者。必先經此略查本島之形勢。間因乏此機關而絕望者。比々然也。是雖基隆之體面有關。而臺灣全島之體面寧獨無所愧怍乎。

而且我基隆無一中等學校無一書林。智育設備之闕如毋論己。乃對來臺者竟無一準備。可提供其調查材料。如以上所云云。豈將擯基隆于臺灣之外乎。則我母國人于基隆建此圖書館之事。其果爲無益否。誠不問可知矣。

若夫完全之設備或公設。則不可不待于鉅產之篤志家。初非一己之微力所能企及也。然爲樹立其基礎。常累年不倦。一圖一卷無不勉力購入之。亦以此多少貢獻。或庶幾有如願之一日也。綿力如予。萬不敢請自隗始。尙望有力之仁人君子。共贊成此舉焉。是尤私心所企望也。竊不自揣。爰將石坂文庫創設之緣由。聊述所感如此。

石坂文庫規定

- 第一條 本文庫ハ一般圖書雜誌類ヲ蒐集貯藏シ以テ公衆ノ閱覽ニ供スルヲ目的ト爲ス
第二條 閱覽者ハ何人ナラントモ十二歳以下ノ子女及帶醉者並ニ此規定ヲ遵守セザル者ニ對シテハ入場ヲ謝絶シ又ハ退場ヲ強請スルコトアルベシ
第三條 本文庫ハ當分午前九時ヨリ午後四時マテ開館時間トス
但三大節、年首、歳末及ヒ曝書掃除日ハ終日閉館セズ
第四條 本文庫ノ圖書閱覽希望者ハ受付ニ備付ノ閱覽證ヲ得テ入場シ閱覽所備付ノ圖書目錄ニ依リ所要ノ書冊、門、函、號、住所、氏名及職業等ヲ閱覽證面相當欄ニ記入シ之ヲ掛員ニ渡シテ書冊ヲ收受セラルヘシ但閱覽ハ無料トス
第五條 圖書ヲ閱覽室外ヘ帶出スルコトヲ禁ズルハ勿論、暫時タリトモ閱覽室外ヘ出ル場合ハ一應其圖書ヲ掛員ニ返却セラレベシ
第六條 圖書閱覽中誤テ亡失シ或ハ點汚毀損スルトキハ同一ノ圖書若クハ相當代價ヲ以テ償還セラルヘシ但該件未了ノ間ハ更ニ他ノ圖書ノ貸出ヲ謝絶ス
第七條 閱覽室ニ於テハ音讀、談話、喫煙ヲ嚴禁ス
第八條 本文庫ニ圖書ヲ寄贈セラルトキハ其運賃ハ本文庫ニ於テ支辨シ又寄贈者ノ指定ニヨリテハ領收人ヲ差出スベシ
第九條 寄贈圖書ハ特ニ寄贈圖書簿ニ其書名及寄贈者ノ芳名ヲ登錄シテ永ク其厚意ヲ紀念ス
明治四十二年六月一日

石坂文庫巡回書庫規程

- 第一條 巡回書庫ハ石坂文庫所藏圖書雜誌類ノ一部ヲ隨時館外ニ出シテ閱覽セシメ地方人士ノ讀書趣味ヲ満足セシムルヲ以テ目的トス但總テ閱覽料ヲ要セス
第二條 巡回書庫ハ主ニ新刊圖書雜誌並實業家、公小學校教員參考書等ヲ以テ編成ス
第三條 巡回書庫借覽所ハ地方官衙、公小學校、公共團體等ニ限リ該圖書ニ關スル管理ハ總テ當該官衙長學校長又ハ團體代表者ニ委嘱ス
第四條 巡回書庫借覽期間ハ往復日數ヲ除キ一週間ヲ限リトス
第五條 書庫ノ發送並ニ返送ニ要スル運搬費ハ借覽所ノ負擔トス
第六條 巡回書庫ノ圖書借覽希望者ハ書庫借覽所ノ管理人ニ就キ規定ノ閱覽證ニ所要ノ書冊住所氏名及職業等ヲ相當欄ニ記入シ之ヲ管理人ニ渡シテ書冊ヲ收受セラルヘシ
第七條 借覽者ハ借覽ノ圖書ヲ叮嚀ニ取扱フ可ク若シ借覽中亡失又ハ汚損シタルトキハ之カ辨償ノ義務ヲ負フモノトス
第八條 借覽者ハ如何ナル場合ニモ其借り受ケタル圖書ヲ他人ニ轉貸スルコトヲ許サス
第九條 巡回書庫借覽希望者(臺北市及基隆街ニハ館外貸出ヲ爲サス)ハ責任者ノ名義ヲ以テ石坂文庫ヘ申込マルヘシ但豫メ借覽期日ヲ指定セラルヘク且ツ之カ發送費用ハ發送ノ際通知スヘキヲ以テ直ニ送付セラルルヲ要ス
第十條 當文庫ニ於テ圖書寄贈ヲ得タルトキハ其運賃ハ當文庫之ヲ支辨シ且ツ寄贈圖書簿ニ其書名及寄贈者ノ芳名ヲ登錄シテ永ク其厚意ヲ紀念ス
明治四十五年七月一日

石坂文庫

- 第一條 本文庫。以藏集圖書雜誌等類。供公衆閱覽爲宗旨。
第二條 閱覽者不論何人。如係滿十二歳以下之子女。與夫帶醉或不遵此章程者。可得拒其入場。或強請其退場。
第三條 本文庫開館時間。權定自午前九時。至午後四時。
但三大節、年首、歳末、及曝書掃除之日。則終日不開館。
第四條 希望閱覽本文庫之圖書者。須有受付所備之閱覽證。方得入場。照閱覽所備之圖書目錄。將所要之書冊門函號住所氏名及職業等。記入閱覽證內。然後交之掛員。以受書冊。
但閱覽概不徵費。
第五條 將圖書帶出閱覽室外之事。固自有禁。即暫出閱覽室外時。亦應還之掛員。
第六條 凡圖書於閱覽中。誤失之。或爲點汚毀損。須償以同一之圖書。或給以相當價金。
但該件未清楚時。而更欲借覽他之圖書者。則謝絶之。
第七條 在閱覽室之間。嚴禁音讀談話以及喫煙。
第八條 凡寄贈圖書於本文庫時。其運賃在本文庫支辨。又照寄贈者之指定。須派領收人。
第九條 寄贈之圖書。特將書名及寄贈者之芳名。錄於寄贈圖書簿。長紀念其厚意。

石坂文庫

石坂文庫第三年報

(自明治四十四年十月一日
至大正元年九月三十日)

六

第一 創立梗概

當文庫の創設者たる石坂莊作は去る明治三十二年十一月初めて基隆に居住せしものなるが、當時基隆に於て官立公、小學校を除くの外普通教育機關の缺如せるを嘆き、機を見て何等か子弟薰陶の方法を立てんことを期し、偶、三十六年二月に至り、時の小學校長故佐藤謙之助氏と相計りて、基隆夜學會(後に總督府認可基隆夜學校)なるものを起すを得たるに際し、之に關聯して、一小文庫を設立せんことを企畫したり

然して當時熱、惟へらく、文庫の設立は決して容易の業に非ず、即ち相當の資産を投ずると共に之を永久に持續せしむ可き確實の基礎を立てざる可からずと、乃ち漸く次の如き決心を得たり、即ち余は明治三十六年以降基隆廳地方稅調查委員に公選せられ、之が手當として毎年金五十圓宛の給與を受けつゝあり、此の収入金は總て之を公共の費途に充つるの考なりしが、恰も日露戰爭に際し、基隆小學校に木銃の備付なしと聞き、乃ち木銃一百挺を寄贈したる外、尙ほ二百餘金の剩餘あり、次に四十年十月臺灣縱貫鐵道全通式舉行に際し、時の曹洞宗管長石川素童師來錫の砌、余が多年錯雜紛糾せる同宗所有土地問題に關し盡力せる廉を以て金一百圓の寄贈を忝うせり、其外余は明治二十七、八年役の際召されて軍に従ひ、岫巖、拆木、海城、紅瓦塞、牛莊等に轉戦せる功績により、勳章及年金下賜の恩典に浴し、爾來是を嚴父養老の資に供しつゝありしが、去三十七年一月、嚴父は不幸疾の爲めに永眠したるを以て、爾來此年金は亦有益事業の爲めに放下する目的を以て蓄積し置きたり、更に又余が年來購求せる書冊一千三百有餘を算せり、此等貯蓄金員と圖書とは纔に以て文庫開創の端緒となすを得可しと、茲に於てか、去四十二年六月一日を以て其趣意書を發表し、其月四日工を起し、同年九月

三十日全く成を告げ、翌十月一日を以て開館届を提出したり

第二 建築及設備

一 建築費 總計金三千五百五十一圓九十七錢、此内家屋立退料金四十三圓八十七錢、工事費二千三百二十一圓五十錢、圖書購入費金五百七十二圓三十六錢、備品費金二百四十圓四十九錢、雜費金三百七十三圓七十五錢

一 位置 基隆港義重橋畔石坂莊作商店の左側

一 構造 間口四間奥行三間總二階建にして階下は石造セメント塗、階上は木造ペンキ塗とし、屋根はスレート葺なり、二階を書庫及閱覽室と爲し、階下の一半を玄關と喫煙談話室に充つ、而して二階十二坪に於ける對重量は約六千四百八十貫目、一尺平方に約十五貫匁の割合なり

一 喫煙談話室 階下玄關の隣室に設く

一 書架 階上に設く、幅二尺六寸、長十二尺、高十尺、連結の書架三列と外に未整理圖書架一臺、及書類入大戸棚を備ふ

一 閱覽室 亦階上にありて、閱覽用大卓子及椅子を備へ、閱覽人の圖書搜索用として圖書目錄(和漢書、洋書、新刊圖書、慶應三年以前の出版圖書、臺灣に關する著書)あり、此外圖書借覽用紙、インキ壺、ペン、鉛筆削臺、小刀等の諸器具、及び圖書寄贈簿、圖書購入簿、金錢出納簿、寄贈圖書類別表、寄贈圖書各人別表、文庫閱覽日、月、年表を置く

第三 本期間の経過

明治四十五年一月二十日、擊劔道具を備付け圖書閱覽者にして使用希望の向へ無料貸與することゝ

七

●本表の外雑誌累計九千三百六十八冊新聞若干あり内桃園文庫に雑誌百七十六冊閱報社に雑誌五百四十冊寄贈し且製本したる結果實際の冊数を減せり

●貸付圖書分類表

部類	月別												合計	平均	百分比例	
	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月				
第一門 國家學、法律學、社會學、經濟學、財政學、統計學	九	六	三	一	三	一	六	二	一	一	一	一	二	二	一	一
第二門 宗教、教育、哲學、語學、文學、藝術	一〇	一四	八	六	三	一	九	二	二	三	八	三	二	二	三	三
第三門 歷史、傳記、地理、紀行、數學、理學、醫學	七	八	二	二	二	三	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二
第四門 兵事、工學、產業	七	四	一	一	九	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
第五門 家庭、類書、叢書、雜書、新聞、雜誌	一七	一八	一	二	二	一	一	二	二	一	一	一	一	一	一	一
小計	五〇	五〇	一五	一六	一六	一七	一七	一六	一五	一七	一八	一七	一六	一五	一五	一五
合計	五六	五二	一五	一六	一七	一七	一六	一五	一五	一七	一八	一七	一六	一五	一五	一五
百分比例	五四	四八	一四	一四	一四	一四	一三	一三	一三	一四	一五	一四	一三	一三	一三	一三

●巡回書庫規定に依り貸出しせし分は表外とす

●閱覽人及圖書貸附數表

月日	開館日數	閱覽人						合計	平均	貸附圖書數			
		學生	官吏	軍人	實業	女子	其他			和漢書	洋書	合計	
十月三十日	縱閱	三	八	五	二	六	一七	〇・六	五〇	六	五六	一・九	三・三
十一月二十八日	縱閱	二	七	五	二	九	二〇	〇・七	五〇	一	五一	一・八	二・五
十二月二十七日	縱閱	二	五	二	五	一	一五	〇・三	一五	一	一六	〇・六	二・一
一月二十七日	縱閱	二	七	二	二	二	一三	一・一	一六	一	一七	一・六	三・三
二月二十八日	縱閱	一	六	一	一	二	一三	〇・一	八六	一	八七	三・一	二・七
三月三十日	縱閱	三	一〇	一	三	二	一七	〇・六	七二	一	七三	二・四	二・〇
四月二十九日	縱閱	一	九	三	五	一	一八	〇・一	一五七	一	一五八	五・四	二・四
五月三十一日	縱閱	二	二	三	二	一	一〇	一・一	八六	一	八七	二・八	二・五
六月二十九日	縱閱	二	四	三	九	一	一八	一・二	八一	一	八二	二・八	二・三
七月三十日	縱閱	二	二	一	三	二	一〇	二・〇	一七	一	一八	三・九	一・八

自明治四十四年十月一日
至大正元年九月三十日

八	九	合	一	一
月	月	計	日	月
三十一日	二十六日	三四六	平均	平均
縦閉	縦閉	縦閉	縦閉	縦閉
一六	四	六三	〇・一八	〇・一八
一六	一四	七八	〇・〇三三	〇・〇三三
一	二	一八	〇・〇五五	〇・〇五五
二二	一九	一九六	〇・五七	〇・五七
一	一	二二	〇・〇六	〇・〇六
一	一	四六	〇・〇三三	〇・〇三三
四六	三三	四二	〇・一六	〇・一六
一・五	〇・一	一・三	一・一三	一・一三
九八	一〇四	一〇三	三・〇〇	三・〇〇
九八	一〇五	一〇〇	〇・〇二	〇・〇二
三・二	四・〇	三・〇〇	三・〇〇	三・〇〇
二・二	三・一	二・五		

第六 寄贈圖書

本文庫は實に上述の如く大方特志家の援助を以て意外の成功を得たり、依て左に圖書寄贈各位の芳名を列記(既住一箇年間)して、其限りなき厚誼を拜謝す

●圖書寄贈芳名 (受付順)

(自明治四十四年十月一日 至大正元年九月三十日)

東京 田中帝國圖書館長殿	帝國圖書館報、明治四十二年五月以降	臺北 臺灣日日新報社	臺灣日日新報、明治四十二年十月以降
東京 文學博士有賀長雄殿	外交時報、明治四十二年六月以降	臺南 臺南新報社	邦文臺南新報、漢文臺南新報、明治四十二年十月以降
東京 帝國海軍協會	海軍新報、明治四十二年九月以降	臺中 臺灣新聞社	邦文臺灣新聞、漢文臺灣新聞、明治四十二年十月以降
群馬 上野教育會	上野教育會雜誌、明治四十二年九月以降	臺北 臺灣語通信研究會	雜誌語苑、明治四十二年十月以降

東京 丸善株式會社	雜誌學燈、明治四十二年十月以降	臺北 實業之臺灣社	雜誌實業之臺灣、明治四十二年十一月以降
東京 萬朝報社	萬朝報、明治四十二年十月以降	東京 東洋協會	東洋時報、明治四十二年十一月以降
名古屋 新愛知新聞社	新愛知、明治四十二年十月以降	臺北 東洋協會臺灣支部	臺灣時報、明治四十二年十一月以降
東京 三越吳服店	三越たいむす、明治四十二年十月以降	臺北 秋山義一殿	雜誌實業之日本、明治四十二年十二月以降
臺北 臺灣教育會	臺灣教育會雜誌、明治四十二年十月以降	臺北 臺灣商事報社	臺灣商事報、明治四十三年一月以降
臺北 臺灣統計協會	臺灣統計協會雜誌、明治四十二年十月以降	臺北 臺灣金光教徒會	雜誌神人、明治四十三年一月以降
臺北 手島兵次郎殿	臺灣報、明治四十二年十月以降	臺北 日本基督教會	臺灣基督教報、明治四十三年二月以降
東京 有樂社	雜誌ぐらふいつく、明治四十二年十月以降	臺北 愛國婦人會臺灣支部	雜誌愛國婦人、明治四十三年二月以降
臺北 田所一止殿	日本勸業銀行月報、明治四十二年二月以降	臺北 高橋醇領殿	雜誌真佛教、明治四十三年二月以降

東京信濃丸	臺南臺灣實業時報社	名古屋倉岡勝彦殿	岐阜勅使河原直治郎殿	東京星一殿	淡水三井榮次郎殿	臺北臺灣雜誌社	東京臺華社	東京東京三田育種場
無線電信日本郵報、明治四十三年四月以降	臺灣實業時報、明治四十三年六月以降	名古屋通俗圖書館報、明治四十三年八月以降	商工新報、明治四十三年九月以降	新報知、明治四十三年九月以降	雜誌新女界、明治四十三年九月以降 雜誌國之光、明治四十三年十二月以降	雜誌臺灣、明治四十三年十一月以降	雜誌さんで、明治四十三年六月以降	明治農報、明治四十三年十月以降
廈門全閩新日新社	汕頭柳田爲郎殿	廣東總領事瀨川淺之進殿	香港松島宗衛殿	東京讀岐丸	米澤宮島寅次郎殿	臺北田所一止殿	臺南臺灣藥業新報社	臺北金光教會臺灣支部
全國日報、明治四十四年一月以降	中華新報、明治四十四年一月以降	國事報、明治四十四年一月以降	香港日報、明治四十四年一月以降	無線電信日本郵報、明治四十四年一月以降	雜誌科學世界、明治四十四年三月以降	雜誌家庭の友、明治四十四年三月以降 雜誌新家庭、明治四十五年一月以降	臺灣藥業新報、明治四十四年八月以降	雜誌新光、明治四十四年八月以降

一四

大連滿洲日日新聞社	大阪笠戸丸	臺北關鐵腕殿	大阪津田勝五郎殿	大阪亞米利加丸	東京吉武源五郎殿	臺北臺灣鐵道會	基隆宮島一郎殿	大阪大阪毎日新聞社
滿洲日日新聞、明治四十四年九月以降	無線電報新聞、明治四十四年九月以降	臺灣はつく、明治四十四年十月(初號)以降	大坂朝日新聞、明治四十四年十一月以降	無線電報新聞、明治四十四年十一月以降	拓殖新報、明治四十四年十二月(第一號)以降	雜誌臺灣鐵道、明治四十五年七月(初號より)以降	特許公報、明治四十五年三月以降	大阪毎日新聞、明治四十二年十月以降
大阪吉川又平殿	臺北總督府農事試驗場	臺北田所一止殿	兵庫阪本牡丹園	臺北株式臺灣銀行	臺北高橋音之助殿	基隆玉置繁雄殿	大阪三越吳服店	大阪山田寅次郎殿
吉川製油所報、明治四十四年三月以降	農家便覽一冊、農事試驗成績一冊、農事講習生一覽一冊、農事試驗成績第八ノ二冊、農事試驗場特別報告二種外二冊	地方資料一冊、經國美談一冊、ホックケット榮根譚一冊、將棋講義三冊、能溪隨筆一冊、漢字の活用一冊、外十二冊	明治四十五年和洋諸植物之定價	日本圓銀流布に就て一冊、露買部の五年一冊、第八次臺灣金融事項參考書一冊、我國貿易の大勢並南洋南洋貿易一冊、外三冊	臺灣慣習記事七十二冊、外四冊	希里薩喇編蒙古文義人傳一冊、喀喇沁王府編蒙文讀本三冊	大阪之三越、明治四十四年十月以降	自著、土耳其畫觀一冊

一五

臺北 總督府殖產局	大連 水野應佐殿	臺北 巖橋章山殿	宜蘭 小松吉久殿	東京 帝國保險株式會社	臺北 小泉貞憲殿	臺北 新聞社臺灣支局	臺北 元田修三殿	臺北 隈本繁吉殿
臺灣礦物調査報告一冊、大山嶺地質調査報告一冊、臺灣造林指針前後二冊、臺灣亞里土壤調査報告一冊、八冊	維新史一冊、通俗三國志上下二冊、東洋大歴史一冊、外五十四冊、英文モントクリスト一冊、嚴格なる露國ザイ皇帝一冊、外六冊、自編、最新臺北市街鳥目全圖二部	成豐壬子秋版(六十四年前)嘴瑪蘭廳志全四冊	惣崎貞夫譯、生命保險通解一冊	島根縣統計書一冊、出雲國造傳統計一冊、鳥取縣隱岐島統計書一冊、外五冊、英文カタログ四種	雜誌海陸運、明治四十四年十月	牧野英一著、刑事學の新思潮と新刑法一冊	菊地前文相演述、九十九集一冊	
東京町田則文殿	臺北 總督府統計課	茨城 松本さき子殿	北投 松本龜太郎殿	東京 醫學博士宮島幹之助殿	淡水 水古橋直殿	臺北 青木崑殿	臺北 平野師應殿	東京 高部多美殿
日本訓言點字說明一冊、東京盲學校一覽一冊	臺灣統計要覽一冊、臺灣統計圖表一冊、四十三年度臺灣統計一冊、同現住人口統計一冊、外三冊	天保十二年(八十三年前)版、新編、林傳義集十五冊、上村玉糸編、刺繡獨習書一冊	自著、護國論一冊、日本國教大道叢誌、明治四十四年六月以降	自著、日本蝶類圖說一冊、東洋學雜誌二十四冊	臺灣稅關十年史一冊、晚餐會來賓演說集一冊、臺灣稅關法規類纂一冊、外十三冊、英文日本財政經濟第六年報一冊	雜誌文藝の臺灣、明治四十四年十一月	本邦新聞史一冊、南清紀行一冊、金原明善翁一冊、外二冊	英文新約聖書神學一冊、初等幾何學一冊、動物學教科書一冊、神學一冊、力一冊、神學一冊、基督教教義證據管見一冊、外四冊

阿蘇 小倉文吉殿	宜蘭 蘭廳	仙臺 伊勢齋助殿	上海 木村増太郎殿	臺北 大津麟平殿	臺北 高垣春治殿	東京 栗林己巳藏殿	軍艦春日 大佐眞田鶴松殿	京都 甘粕勇雄殿
自著、銀行實務詳解一冊	宜蘭廳第五統計書一冊、宜蘭廳統計一覽一冊	仙臺藩祖實錄上下二冊、伊達世臣家譜略記一冊、靈忠錄一冊、歐南消使考一冊	自著、刑法施行法大意一冊、法律大辭書一冊、製糖之業一冊、稅法整理論一冊、刑法講義一冊、外三冊、合本雜誌十三冊	英文理書概要一冊	憲法一冊、國法學一冊、國際私法一冊、平時國際公法一冊、戰時國際公法一冊、民法總論一冊、民事訴訟法上下二冊、外十七冊	イーエツチハウス著(明治七年)英文征蕃記事一冊	自著、日章旗考一冊 宗教問題之解決一冊、經濟原論一冊、手形法論綱一冊、外四冊、英文初等化學一冊、赤十字の姉妹一冊、火力と武力一冊、外一冊	
佐世保 砲兵少佐平崎節信殿	臺北 大石和太郎殿	斗六 諏訪忠藏殿	臺中 岡本久太郎殿	東京 來栖健助殿	臺北 高塚彊殿	臺北 總督府鐵道部	群馬 劍持君平殿	臺北 大石孫平殿
明治歴史之裏面一冊、興日本歟亡日本歟一冊、支那事情一冊、殖民法制著書目次集一冊	自編、犬供養一冊	此一戰一冊(同氏より圖書購費として金一圓寄附に付此書購入)基督之青年訓一冊、自編の翻譯英人之日米戰爭一冊、菊地著取引所研究資料一冊、致富之友一冊、英文日本の株式取引所一冊	自著、憎訂空中之經營一冊	鐵道部第十二年報(明治四十三年度)一冊	吾妻郡役所編、吾妻郡案内一冊	坪内逍遙譯、ハムレット一冊		

臺北小澤啓吾殿	京都少兵大崎峯登殿	臺北佐藤源平殿	臺北游有士殿	臺北杉浦和作殿	岡山橫山泰造殿	基隆田村音殿	大阪小西啓六殿	基隆辰巳宗太郎殿
新竹縣志三冊、感化救濟事業講演集一冊、名古屋商工人名錄一冊外十八冊	自著、鴨綠江一冊、自著まごころ一冊	岡本柳之助著、日露交際北海道史稿一冊、東臺灣港浦鹽務一冊、樟樹セルロイド製法一冊、日本帝國國勢一斑一冊外一冊	校友會誌、明治四十四年十二月	自著臺灣商工人名錄一冊、自著蕃匪討伐紀念寫真帖二冊、臺灣歷史歌朝鮮歷史歌滿洲鐵道唱歌合本一冊	鎌田榮吉著、獨立自尊一冊、新渡戸博士著、修養一冊	鐵道院所屬線路圖一冊	大町桂月譯評、新撰日本外史一冊	鷗崎熊吉著、薩の海軍長の陸軍一冊、ホーマーリ著、日米戰爭一冊、臺灣商工人名錄一冊
基隆今井清一殿	臺北高野三郎殿	臺北關口隆正殿	東京尾崎行雄殿	臺北石山丹吾殿	新竹北川重三郎殿	東京大工兵谷田繁太郎殿	瓜哇折田宗吉殿	臺北岩淵恕殿
中學校數科教科書代數之部上下二冊、あみみ式立體幾何學一冊、女子幾何教科書一冊、平面三角法教科書一冊外三冊	農學大全一冊、氣象學一冊、地質學一冊、植物學講義一冊、實業化學一冊、初等化學一冊外一冊	自著清國公文一冊、自著故兒玉參謀總長傳一冊、愛軒遺文上中下三冊、予が參加したる日露戰役前後二冊外二冊	東京市史稿(皇城編)一冊同附圖一冊	幕府衰亡論一冊、明治法典一冊、獨字政典一冊、法理學一冊、二十世紀の武士道一冊、應待談話法一冊、論理的經濟學一冊外七冊	南清觀光紀念寫真帖一冊	教育總監部編、明治三十七八年戰役忠勇美談上下二冊	造林學各論上中下三冊、造林學二冊、炭燒副產物製造法一冊、通俗土壤學一冊、野外植物觀察一冊、雜草栽培法一冊外十冊	ルナン氏耶蘇傳一冊、離分論一冊、運命之改造一冊、工學字彙一冊外十冊、英文武士道一冊、バラモンド嬢一冊外五冊

東京森村市左衛門殿	基隆沈德融殿	基隆金光教隆教會所	東京田原利殿	東京文學博士井上圓了殿	東京男爵澁澤榮一殿	東京安田善次郎殿	臺北村田義教殿	東京男爵近藤廉平殿
自著、獨立自營一冊、自著予が信仰五冊	常備大師著、信心銘枯提落草談一冊	佐藤範雄講述、三教會同と將來の宗教一冊	日本書翰學會編、書翰講義一冊	自著南船北馬集一冊、自著明治徒然草一冊	自撰、明治商工史一冊	金森通倫著、安田善次郎翁一冊	天保七年(八十八年前)版、醫療方規矩大成一冊	商業道德一冊、高木三郎翁小傳一冊、發明品展覽會報告一冊外二冊、諸雜誌七百九十八冊
高知吉岡傳吉殿	東京桑議員村上先殿	臺南岩崎民三殿	茨城橋詰孝一郎殿	新嘉坡奧山章次郎殿	德島柏木直平殿	基隆砲兵山根信一郎殿	巖手伊能嘉矩殿	臺北浦口文治殿
文章大觀一冊、實踐會計整理法一冊、尊い犧牲一冊、5び筆一冊、日記新文誌一冊、土佐名鑑一冊、薩摩琵琶歌一冊外一冊	自述、予が帝國議會に於ける四年間一冊	天路歷程一冊、英國文學史一冊、機外觀一冊、生物及人工一冊、太郎は如何にして教育すべき乎一冊外三十六冊、英書五冊	自著、中學生と家庭の教養一冊	南洋一冊、十九世紀外交史一冊、修正銀行及外國爲替一冊、外四冊、英文天災一冊、青年一冊、近代主義一冊、幻像一冊外七冊	自編、德島縣の唯一と嗚矢(二冊)	西歷一九〇一年ヨセフ、キエルシニエル著、獨文支那一冊	自著、戰時教育附戰勝後教育一冊、福澤全書十八冊、吳博士述余の臺灣旅行一冊	海舟先生一冊、品性之奮闘一冊、香山拾葉一冊、萬國青年大會講演集一冊外三冊、雜誌六十三冊、英文詩及散文一冊、學生界一冊

澎湖島 田中靖一殿	鳥水著日本山水論一冊、武島著文章入門一冊、池田編萬葉短歌抄一冊、冥想雜感朝思一冊
基隆 白莊司芳之助殿	采詩集第一編(明治四十五年六月發行)南滿洲鐵道案内一冊、旅順管内一班一冊
臺北 石川欽一郎殿	自著、洋書印象錄二冊
瑞芳 尊德文庫	二宮尊德一冊、報德分度論一冊、報德論一冊、尊德翁略傳一冊、報德一夕話一冊、二宮翁夜話一冊、報德之眞髓一冊、外十冊
瑞芳 松陰文庫	松陰先生武教講錄上下二冊、松陰詩集上下二冊、甲子兵災圖上下二冊、講義附記五冊、通志二冊、回顧錄二冊、外三十二冊
臺北 清水重隆殿	英文雜誌、ホンチ一百五十三冊
臺北 總督府研究所	臺灣總督府研究所報告第一回(明治四十五年三月)一冊
東京 造船大監 櫻井倉三殿	鈴木周作者、ハルリ提督日本遠征記一冊
臺北 山木利涉殿	中澤、八木共著、日本考古學一冊
臺北 土屋理喜治殿	二〇 刑事法典一冊、銀行論一冊、作詩術一冊、大審院民事判例要旨類集一冊、同判例一冊、同要旨類集追録二冊、外三十一冊、外雜誌
東京 海軍東郷吉太郎殿	自著軍人武士道論三冊、自著掃露餘風一冊、老子講話一冊、護國論一冊、國體の本義一冊、六論三略講話一冊、職分論一冊、外八冊
臺北 山口尙之殿	近世心理學一冊、幾何學辭典三冊、外百二十九冊、英文行爲と思想一冊、ロビンソンクルソフ一冊、海の中の家一冊、外三十六冊
臺北 今泉利興殿	日本之三大政策一冊、日本蒙求初篇二冊、同續編二冊、クラウストン一冊、大日本民法一冊、外三十八冊、英書三冊
臺北 川合真永殿	自著、新撰實用日華會話自在一冊
淡水 岩政憲三殿	臺灣稅關要覽(明治四十五年三月)一冊
函館 飯島金八郎殿	矢野恒太著、天下之愚論藝者論一冊
臺北 山本英太郎殿	最近經濟學講義一冊、帝國憲法一冊、財政學一冊、行政法一冊
臺北 山下江村殿	自編、臺灣養蠶の手ひき一冊

基隆 熊本源吉殿	商業要鑑一冊、トラスト論一冊、利法各論一冊、新民法通解上下二冊、國際平和論一冊、非常國際法一冊、外十九冊
臺北 總督府 財務局稅務課	外國貿易年表(明治四十四年度)一冊
軍艦香妻 機關 栗田富太郎殿	自著、旅順閉塞回想談一冊
泉州 津田榮殿	鐵筋混凝土の案内一冊
臺北 木村匡殿	井上博士述國民道徳論一冊、大正元年九月六日故七里恭三郎君追善紀念の爲め金二圓當文庫へ御寄贈に付該圖書購入
臺北 宇野覺太郎殿	久保天隨字川泰次共著、詞華類典一冊

●購入圖書

日本百科辭典卷之五	一冊	伯耆大隈重信監輯 明治四十四年十二月版
英既往及現在の臺灣	一冊	ダキッドソン著 西曆一九〇三年版
淡水 水廳誌	一部六冊	同治九年版陳培桂輯
英文 評論之評論	米國評論之評論社發行 明治四十五年三月以降	

外圖書五十一册及新聞雜誌各種

RULES OF THE ISHIZAKA LIBRARY.



- Article I: The library collects all kinds of books and periodicals for circulation to the public.
- Article II: The library is opened free to the public, but children under 12 years of an age and intoxicated or disorderly person are not allowed for admilssion.
- Article III: The library is opened from 9 a. m. untill 4 p. m., except the three great national holidays, days of airing, the new year's day and the end of year.
- Article IV: Visitors are requested to obtain first the admission slip, on which number of volumnes, classification, case and book number, as specified in the catalogue, their names, residence and occupation shall be filled out, and then shall receive books from the librarian in exchange for the slip.
- Article V: Visitors are requested not to carry away books from the reading-room. The books must be handed back to the librarian as soon as they leave the room.
- Article VI: If visitors loss, damage, or stain the book they shall replace the same book or refund the cost. Such person shall be refused to apply for another books untill the matter is settled.
- Article VII: Visitors are prohibited to read aloud, talk or smoke in the reading-room.
- Articles VIII: The library will bear the carriage for any books contributed or will send the receiver at the request of a contributor.
- Article IX: Books contributed shall be kept in record of the library.

June 1st, 1909.

THE ISHIZAKA LIBRARY.

Thus a library containing such books needful to raise the intellectual taset of the people is considered a pressing requirement. This idea is more strongly urged upon us when we consider that Keelung, by virtue of its geographical situation, is the gate of the island, which every traveller must pass on coming from the mother country.

But, unfortunately, Keelung has no school of middle course, nor a single bookstore, that the need of establishing a library in this place is greatly required.

Such an enterprise is generally started by the Government or by some philanthropic millionaire, but we also believe that through the combination of our humble efforts, we may be able to build up such an institution. To carry out this plan, we have already erected a substantial building, and, at present, we only need books to fill up our library building. For this purpose, I, as the organizer of the library, make an appeal to the public for its generous assistance. Trusting that our intention would receive a hearty response from public and that this free public library may be useful to the residents and visitors in this city.

Sosaku Ishizaka.

June 1st, 1909.

Keelung, Formosa.



ARTICLES OF THE LIBRARY

- Article I: The library shall be open to all persons...
- Article II: The library is open to the public...
- Article III: The library is open from 9 a.m. to 5 p.m....
- Article IV: Visitors are requested to observe the following...
- Article V: Visitors are requested not to carry away books...
- Article VI: If visitors lose, damage or stain the books...
- Article VII: Visitors are prohibited to read aloud...
- Article VIII: The library will bear the charge for any book...
- Article IX: Books consigned shall be kept in order...

THE LIBRARY

大正元年十月五日印刷
大正元年十月七日發行

(非賣品)

發行者 石坂文庫

右代表者 石坂莊作

臺北廳基隆基隆街義重橋四十七番地

終

